

GAP 手法の導入と生産者番号表示による 大豆種子の信頼性向上

東近江農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

近年、大豆の品種転換が進むとともに種子更新率が向上し、優良な大豆種子の生産と供給がより一層重要となっています。近江八幡市加茂町は、本県大豆採種面積の56%を占め、4品種の種子を生産しています。品種数の増加、手選別による調製、生産者の高齢化などのため、異なる品種が混じる「混種事故」のリスクが増大しています。このような中で、平成22年度、異なる品種名の紙袋に誤って別の種子大豆を入れてしまい、「混種事故」に繋がりがねない事象が発生しました。幸い、両品種の特性（色）が違ったことから、出荷前に発見され、全量を処分し、「混種事故」は未然に防止できましたが、加茂町全体の種子契約出荷数量が大きく不足する事態となりました。そこで、平成23年から加茂町全体でGAP手法（農業生産工程管理）を導入して、リスク管理を徹底することになり、JAと連携して高品質な種子を安定的に生産できる体制づくりを目指しました



出荷前の検査の様子

【普及活動の内容】

種子生産では、工程毎のリスク管理を着実に実施することが重要となります。そのため、水稻種子の取り組みを参考に、大豆種子生産に特化したGAP（農業生産工程管理）（以下、大豆種子GAP）を導入し、「生産者番号表示」によって大豆種子の信頼性を高める活動を支援しました。

平成23年度は、生産工程毎にリスクを管理するチェックシートを作成し、播種前の研修会で大豆種子GAPに取り組む背景と重要性を説明しました。生産者は大豆の生育中と出荷時の2回、チェックシートをJA事務局へ提出し、事務局が各工程の管理状況を確認する体制を構築しました。さらに平成24年度は、新たに改善すべき点として、生産者が主体となって「生産者番号表示」を導入するよう誘導しました。



生産者番号が表示された袋

【普及活動の成果】

これにより、出荷時の生産者ごとの数量確認が容易になり、トレーサビリティ導入の礎となりました。さらに、自ら生産者毎の番号を袋に表示したことで、より一層、種子生産者としての誇りを持って生産にあたるようになり、「混種事故」に繋がりがねない事象は発生していません。また、JAではプロジェクトチームを立ち上げて、継続的な改善を図る営農指導に取り組まれることになりました。今後とも、JAと連携して安定的な種子供給ができるよう技術的支援や生産者のモチベーション維持につとめたいと思います。